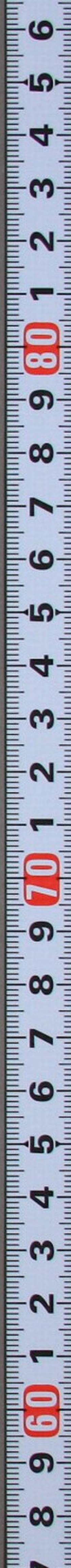


雨夜物語
大正十一年
上





宮本氏
之文庫

物にふりては世に於て愛の兒母を光源中此の體
らるる也やふたへりたがひに乳を中よりあふれ
る乳をいへば心にとくはるりては我れを今もしり
りし人衆もかゝるふりてはるるを母にたつて
るる我れをいへばふれに人のはるるをいへ
るる我れをいへばはるるもききかするるをいへ
るる言ふにの言ふは是なり我れをいへばはる
るるに言ふはるるに言ふはるるに言ふはるるに

千尋の淵に身をまかせしは
一に身をまかせしは
とせよと大城の御守り
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは

うれつたりとまゝに
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは
おのれに御守りあるは

田秋の歌
おのれに御守りあるは

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、

一に... ちぞく... 住く...
 一に... ちぞく... 住く...
 一に... ちぞく... 住く...

此のい

もつ... 鬼の... 借...
 もつ... 鬼の... 借...
 もつ... 鬼の... 借...

み月の

なが... け... け...
 なが... け... け...
 なが... け... け...

上

えそりーかきりいぞ

ゆめくもちりうなる

るさりかすーいさつ

なつさりさるいへり

大敵油

乃安の釣奈るれ

約めくいり即ち

火のゆえさうじ

きく斬差の類なり

むまび焼きさ儀式

とれたるをさうと

りたる

みづの 折厨子の厨子の

園雅要抄よりく

いさくのかと折よれ

さうさつけささま

せらいろはわらぬと類

聚雅要抄折厨子の

紙管の料紙は柳重

きこりくまちがほなうらん夕ぐさたど

の **ふ** こそえは **あ** ありと **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

原氏の考むことをえんぞさうぶやまきとゆうしん中持

こころつてんまよかくさまげなるともども

こそはりまれとそふあてふ **い** せんか

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

まじまじ **え** せん

乃多る。万葉集。各
寺師人死為良思妹
不所知。日異羸治人丹

皆ぞう 皆ぞう

淡るく。大空。とり
志まり。たふ。い
と。加茂縣主。いひつ。紫
式部日記。ふ。か。ん
と。抄。ひ。た。る。人。お。は
そ。ら。あ。く。い。ふ。ま。ち。ら
け。ら。ん。ま。ご。う。か。ら。う
め。れ。び。あ。る。を。お。い。び
い。う。大。ぞ。う。れ。ほ。ま
あ。ん。

二の町 一の町。い。ち。ろ。う。ま。り
町。二。三。い。れ。よ。次。り
ま。ど。居。る。町。と。い。ふ。ま
こ。う。次。る。ま。り。を。い。ふ。俗

語。

そこよこそ そこハ
其處よこそ。其許とよ
よは。一。万。葉。集。よ。そ
こ。あ。と。い。ふ。其。所
此。所。と。い。ひ。り。
これいふ。と。あ。も。か
あ。ら。は。い。も。ま。り。い
の。類。い。ふ。ま。り。い
う。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま
き。と。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま
ら。は。執。の。も。ま。り。い。ふ
あ。ま。り。い。ふ。ま。り。い。ふ
松。條。の。端。い。ふ。ま。り。い。ふ
ま。り。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま
ま。り。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま
た。あ。ま。り。い。ふ。ま。り。い。ふ
ん。の。み。い。ふ。ま。り。い。ふ

つ、これのふみまらつたをたまり。 ころから。結ひつ。源氏の

あまの ころから。おほく。 あひらきふかひ けいへ

たふらめ。す。み。ま。や。さ。く。なん。の。づ 厨

子 ー。を。い。ひ。く。ー。と。の。こ。ま。 わが。か。ま

ねらん。い。あ。ん。と。そ。か。く。ゆ。め。あ。ぞ

取中 ま。り。結。ひ。つ。ま。り。 あの中 女。の。れ。い。ま

も。と。結。ひ。つ。ま。り。 ま。り。が。い。ま。あ。る。り。あ。ぞ

ま。り。く。なん。み。た。ま。ん。 あ。る。誰。も。ま。り。の。だ

う。い。づ。れ。あ。さ。け。ま。り。 あ。み。ま。り ち。ー。と

か。さ。ま。り。 あ。ま。り。い。ふ。ま。り い。い。い。い

ま。り。 あ。ま。り。い。ふ。ま。り ぶ。ん。よ。よ

ろ。ー。ま。り。 あ。ま。り。い。ふ。ま。り み。た。ま。り。と

ま。り。 あ。ま。り。い。ふ。ま。り か。さ。 か。さ。我

ま。り。 あ。ま。り。い。ふ。ま。り ろ。 ま。り。い。ふ。ま。り

を後のたのしくよよはれ
りしをくろくをり
小結着せり。

見知んが

みづのりよよとよ
るをいふ自得たる

ここのついで大校詞

抜給清給といひ出雲

國造神賀よ忠美恐

美申賜久とみづく

乃のついで人をち

くめいといふとく自得

志すゆるるるるるる

草書を

ひか筆とてしらせ

みをとくやよか

かひとれもゆるるる

生ゆくされもゆる

まいいとかいーや。[女の] 我らえらるるは

うをとおのぐさつら成やうく人をばおと

しりあるぞ [まの] かくらひしことおほく

おやなごらそひ [むすめ]

りくわぶめくおひちりんのわむとてうら

まさばむだむ [その女の] かくらひし

あつしうふごかきるるもあう。 [その女]

あり。長恨歌楊家有

女初長成養在深窓人

未識

かかかか 片才あり

其人の養をををを

こーきつていへ

こよ未摘花乃琴

ひきあふとつて深氏

の心とつてあひ頼

をかーく

さくさく

とあおり

もみつて

よむい

うらおほ

初におほ

きとつて

やうある

くらをかく。うちおほとれたるやか

あつしうふごかきるるもあう。 [その女]

まさばむだむ [その女の] かくらひし

りくわぶめくおひちりんのわむとてうら

あつしうふごかきるるもあう。 [その女]

まさばむだむ [その女の] かくらひし

りくわぶめくおひちりんのわむとてうら

あつしうふごかきるるもあう。 [その女]

ちのあさきまゝ

まじりてさうたりし
ゆふのあけはひのま
さかひ進もくもくは
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし
まじりてさうたりし

びねんよ 人々のま

それ志のあらし

にみおもうせわもういなくれんあるべさ

と。 以中將のそのま うめたふるりき

を 我妻よりて かけなれむ 海氏のまのま

と そのまのま かけなれむ 海氏のまのま

と そのまのま かけなれむ 海氏のまのま

と そのまのま かけなれむ 海氏のまのま

て 万葉よ故縁と

あ 梅の花
といふ花のまじりけ
を食とけつをいふ
ふくむはるれは
ふくむはるれは
ふくむはるれは
ふくむはるれは
ふくむはるれは
ふくむはるれは
ふくむはるれは

あはまのこもやうん 海氏のま

うらほく魚

みくさめ 一葉一紙の かさうどもなきい人あ

んやとのこまへ 以中將のま うとさごかり ま下

ならんあらしよ わむれ まりされ

より侍らん ひこせう さかかたなくらさ

きた 極 いた 後

むら 女 と と しかず と ひと と

あつる死 ことのかしら
 後の御志古漢ふあつ
 さつる久し古(八)岐
 中勢集ふみゆも
 ちふよみくもす
 るえし。

よまれ
 こそはしめ人の志れたうくうま
位
 われは人よのしかづき
大切あふめしうへほひのしん
 あき
 かく
ま様子位もさるい移あ
 ぶすもおぬく志れんよそのけし
な
 よもりまべー中の志れふなん人のけ
位
 空際新端の杖ニ女のそまらりてゆ
 ありてれたかくるおひきさみえ
 あり
 日らふべきことかづくおちるべた志
下の
 もりきあことせりしおふるれは
こた耳し

ふちげなる うこの
 かたもまうあ
 うま

なやびと ちみくみ
 人とうすうそて直人
 といふおる
 公卿をいふむれ乃
 約むれハ群集のまよ
 て郵類あるのをよ

みくたむかー
こわれしやまらうかん
ん
 以中將の
 ちあること
源氏の志の由
 ち
 てその志れく
上中下の
 三
 乃志れよおれてうま
のこ位位藤原うま
 志れた
ま
 くうおれちがら
世ははれ
 官位ひき
 くそ人けを
し
 ちわなごまらるのちりたる
公卿まらるのほうちん
 ちわなごまらるのちりたる
新田うらきたる人うん昇進
 ちわなごまらるのちりたる
止

いせお伊はまらうしとて

もあむむうしとて

と死の心もあらうしとて

とめてまうしとて

守とていふこれに官

よりいふとや一むら官

さうさうのなまら

四さうのひくまうし

ことま

かづていひ 職官令を

按て受領は職事多

き官あれがこれの

いふはかりりやあ

りあうて

受領より宰相まで

がうし 惟光のいふ

大臣の後より受領

より明石入道乃む

めの教中品のうち

に殊異あるの字を

てわやうしとて

をいふ

いせお伊はまらうしとて

もあむむうしとて

と死の心もあらうしとて

とめてまうしとて

守とていふこれに官

よりいふとや一むら官

さうさうのなまら

四さうのひくまうし

ことま

かづていひ 職官令を

按て受領は職事多

き官あれがこれの

いふはかりりやあ

りあうて

受領より宰相まで

がうし 惟光のいふ

大臣の後より受領

より明石入道乃む

いせお伊はまらうしとて

もあむむうしとて

と死の心もあらうしとて

とめてまうしとて

守とていふこれに官

よりいふとや一むら官

さうさうのなまら

四さうのひくまうし

ことま

かづていひ 職官令を

按て受領は職事多

き官あれがこれの

いふはかりりやあ

りあうて

受領より宰相まで

がうし 惟光のいふ

大臣の後より受領

より明石入道乃む

いせお伊はまらうしとて

もあむむうしとて

と死の心もあらうしとて

とめてまうしとて

守とていふこれに官

よりいふとや一むら官

さうさうのなまら

四さうのひくまうし

ことま

かづていひ 職官令を

按て受領は職事多

き官あれがこれの

いふはかりりやあ

りあうて

受領より宰相まで

がうし 惟光のいふ

大臣の後より受領

より明石入道乃む

そのひとこ
うらひくまぐしーら

んもこまぐしーそのひとこあるがら

べたこまぐしーそのひとこあるがら

そのひとこあるが
ふもおまぐしーそのひとこあるがら

そのひとこあるが
よがーそのひとこあるがら

かみーそのひとこあるがら

人よそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

おまぐしーそのひとこあるがら

八面にこそまをさし
 たるのこころ。若成却
 が婦に南のふしを
 くら下よ。つゆ。へ田舎よ
 かし世く。父のやうか
 した。め石の上のよ
 若世の書よ。つひ。つひ
 ハ伊とのみ乃。毒まの
 ことも。遠くは。他。まも
 るべし。

ちもき死し
 ことも。知る。こも。あき。福。や。れ。ら。ち。よ。その女
 と。い。く。折。り。し。あ。ぐ。り。ま。ら。な。く。し。い。く
 だ。ら。こ。も。日。出。を。ゆ。き。な。う。く。び。み。え
 ころん 其女の その女のあまのこころをうらやましくしりて
 かし。う。も。ま。く。も。い。か。が。折。り
 の。か。よ。ま。さ。う。か。さ。し。ん その女の
 ら。く。く。ま。び。あ。き。か。い。の。ん。び。よ。ま。を

その女の

ちもき死し
 ことも。知る。こも。あき。福。や。れ。ら。ち。よ。その女
 と。い。く。折。り。し。あ。ぐ。り。ま。ら。な。く。し。い。く
 だ。ら。こ。も。日。出。を。ゆ。き。な。う。く。び。み。え
 ころん 其女の その女のあまのこころをうらやましくしりて
 かし。う。も。ま。く。も。い。か。が。折。り
 の。か。よ。ま。さ。う。か。さ。し。ん その女の
 ら。く。く。ま。び。あ。き。か。い。の。ん。び。よ。ま。を

てやがこのお

葵の上。上の。お。も。う。ら
 へ。あ。ら。う。び。た。ご。ま。ま。ふ
 ね。る。人。も。う。ま。と。思。は
 せ。び。い。ま。こ。み。あ。い。し
 ぬ。ね。を。く。み。ま。う。て。死
 者。の。り。や。い。ん
 一具乃。は。装。束。い。ま。う。て
 ま。ら。で。あ。り。の。こ。ま。ま
 う。ち。ま。ら。う。ら。び。か。ま。乃
 ひ。も。ま。ら。う。ら。び。あ。ら。う。

が。死。ま。の。ま。ば な。な。う。が。死。の。こ な。な。う。が。死。の。こ
 み。ア。れ。バ 武。終。い 武。終。い 我。い。の。う。ま。の。よ。ら。い。死。ま
 ら。え。あ。ら。我。お。り。ひ。く その女の その女の の。た。あ。ま。あ。と
 い。ん。う。ら。ん。指。も。い。ま。び。い。ま。ね。か。の。志。ね。と
 お。り。ま。ま。か。び。な。る。世。を。と 其女の 其女の 志。い。お。ほ
 ぶ。 其女の 其女の 志。い。お。ほ
 なる。よ。る。所。を。かり。死。ま。ま。ま。け。た。う。く。ま。い。る。

直衣

其上られハ君臣をいふ
今ハ三公諸司百官乃
之をたるとは擧ぐる

とこれハかり

古今集よき人あまをいふ
まればかりかぐまれば
あれいひまらむぞあま
まふさよといへるまま
まらしたへまればあへ
よりまをんとまればあ
まひてあまをいづれも
あまをいひまらむぞあま
換よあまをいひまらむぞ
このあまをいひまらむぞ

女のうへはあまをいひまらむぞ
ひまらむぞあまをいひまらむぞ
つらき人のあまをいひまらむぞ
とらむぞ

えうそめつら人乃

是ホハ即末又みゆる
原氏のあま。○我れあま
つらきあまをいひまらむぞ
まらむぞあまをいひまらむぞ
まらむぞあまをいひまらむぞ
の上花散里末摘花を
とらむぞ

三公ハ諸司小たまけり
諸司百官
べしあまねがみハ志のたまけりあまねがみハ

三々よあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

ら。妻と定ん女乃
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

ままきひとひまらむぞあまをいひまらむぞ
その女乃

家の内を路々も天下のやくまらむぞあまをいひまらむぞ
たたらあまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

かこくあまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ
あまをいひまらむぞあまをいひまらむぞ

雨

止五

ひさしうなまき 俗にま相を
 とつよおる。俗信あり。
 ありは、髪はるまきせしむる
 き、真加のさるるのさきと
 ほか、さおとをつくする
 時の俗信より、下のり
 りをまきておとさるの俗は
 りよをあまをさるる。
 ひさしうなまき 俗にま相を
 のさるる俗信ありとさる
 とばさるるさるるさるる
 とのさるるさるるさるる
 よて、家のこととさるるさるるの
 上界に日本記より、戸母と
 きて、親自とつよさるるさるる
 外、家の内のさるるさるる
 て、一のさるるさるるさるる

べーとさるるさるる
 くらもよからべーとみえたらよ。
 さるるさるるさるる

方のさるるさるるさるる
 実相さるるさるるさるる
 さるるさるるさるる

たさるる
 さるる さるる さるる
 さるるさるるさるる

髪とさるる
 みまさるるさるるさるる
 さるるさるるさるる

さるる
 うのびさるるさるるさるる。
 男の さるるさるる

さるる
 ざるるさるるさるる
 さるるさるるさるる

あささるる さるる
 朝夕の出入りつけさるるさるる
 さるるさるるさるる

ゆゑ、家の内の一の女を
 さして、片主といへり、これ
 より、移して、女の通称を
 せり、和名抄に、老女の
 稱といへり、凡をいへり、
 万葉集にも、吾子とて、
 とよさるる。

他人の上我方の上さるるさるる
 うのく乃たさるるさるるさるる
 さるるさるるさるる

男の さるる さるる
 の さるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるる

他人にさるるさるるさるる
 うとさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるる

我が妻のさるる
 ちりさるるみん人乃さるる
 さるるさるるさるる

さるる
 べかさるる人、
 男の さるる さるる
 さるるさるるさるる

さるる
 うらさるるさるる
 さるるさるるさるる

さるる
 うらさるるさるる
 さるるさるるさるる

あこらら、 ねくーれ
 ころるまま
 うーあやれ、 おろこちら
 人伝らるくそそをえわこ
 する餅へ、 膳よそそそそと
 りそとそそそ

さうさ
 人志れぬおひび あふらのう
せいおさうくためいさうそそそそそそそそそそ
 けあそれともちひりりそたそそ おはんそそそ
 いらそぞなごあそらそらささああれあそそ あふらのう
 いた、い、は、を、か、ね、 あ た、び、ひ、ご、う、ま、い、あ

よおつみきい、い、と、母を
 らら、い、飾りえがう
 花までとめい、あう。

さあ、ね、て、し
 ねくやううるうん人をとかく ああかのあそ人
たひさつくろひくおるざらみざらん ああ
かちういんかこまなれうううううううううう
 ろひいあうとそそあひ あああううううう
 べー ああ
 かひくみんかどらううううううううううう ああ
 いーみろへき ああううううううううううう

そのおのひんううううう

うううううううう

人のもとなん

そはーく

おのがどろろのをばそ
づといふ和名抄。樛木。和
曾波乃木とあり。今りふ
りきうして。未ふかど
れ。之角。ちるの。は。は。く
ふ。り。て。ふ。り。つ。ま。が。せ。れ
ゆ。之。隔。意。る。を。そ。づ。く
し。た。と。り。ふ。

いしりちをりーにそのあひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

その女乃あひだくさるその女乃あひだくさる

移りけがり

万葉に移りけ人を依
人とまう。こゝは移ら
き。さう。は。と。な。ま。る
く。は。と。な。ま。る。は。と。な。ま。る
く。は。と。な。ま。る。は。と。な。ま。る

ろーき

かへりてやうのまよ

ありがあまのまよ

いひを

いひを

定めりぬく

官位筋目を

なりげくいまいて

上よ海を

をばさるもい

ぢきかやう

とよのあま

あまのあま

あまのあま

あまのあま

あまのあま

ゆきりー 万葉に
 故縁聞而とち由來の
 義心らへちみとらん
 とりかごこりー ばいゆ
 ちしをうりこりーと
 むがりもつる。

うーろやきく 背日痛
 上のうーろめく 女
 むろくうーろやき
 きし。

あまのいしひおくらけり。 そのいしひおくらけり

その あまのいしひおくらけり。 そのいしひおくらけり

らんをばよらびよおのひはきく おのひはきく

くらかあらんをもちあがらよめめく 強てし

えんぞうーろやきく えんぞうーろやきく

よらびよらあまのいしひおくらけり よらびよらあまのいしひおくらけり

えんぞう えんぞう をや 又女の えんぞう えんぞう

ちんちん

ちんちん
 古書よみみえぬことばに
 後拾遺集よ 匡衡は乃
 ちんちん夜をうらやみよ
 せうらによらん 女の人ぞ
 ちんちんのこころなや
 してたしめぬことばよ
 るよ又志乃ららぬをを
 きはの色のまきよて
 りみえ。

ちんちん ちんちん をや 又女の ちんちん ちんちん

あまのいしひおくらけり あまのいしひおくらけり

えんぞう えんぞう をや 又女の えんぞう えんぞう

あまのいしひおくらけり あまのいしひおくらけり

えんぞう えんぞう をや 又女の えんぞう えんぞう

あまのいしひおくらけり あまのいしひおくらけり

えんぞう えんぞう をや 又女の えんぞう えんぞう

そのいしひおくらけり

あまのいしひおくらけり あまのいしひおくらけり

抱ぐりようみー
伊勢抱後ふ成其のい
でいふはんりうとい
ひやせんとうみたるど
有常の妻乃あまた
ありうらなうを兼て
狩りをもそへりあり

海をこ
らうづらむをひうれぬう。
くひ

つらな侍うーそれ女房あまの
たのむ

幸ぶち抱後ようみーをきこふいとあ

それよかるーくらうきことうねる。あ

みごをきかんあー侍りーいよあひ

ふいせからぐーくらうきことうねる。あ
さうらうてあーくらうきことうねる

あうらうーくらうきことうねる。あ

人の心をみちめやうー

伊勢抱後ふ成其のい
りひかりてままとり
るごとく。夫のふん。既
にあうたうを。臨時よ
つらたやうらうらうらふ。
種もあうらうらうらふ。
あうたうらうらうらふ。
あうたうらうらうらふ。
あうたうらうらうらふ。
あうたうらうらうらふ。
あうたうらうらうらふ。

あめ乃まへうらうらうらうらふ。
あいのん

ハカシ人の心をみちめやうーあひがらま

うひをきことうねる。
その男の心をみんと

あうらうらうらうらふ。
あいのんながき世のあひ

あうらうらうらうらふ。
あいのんあうらうらうらうらふ。

あうらうらうらうらふ。
あいのんあうらうらうらうらふ。

あうらうらうらうらふ。
あいのんあうらうらうらうらふ。

古所著之古ハ老云と
ついでらとハ本朝文粹
に女をけがめて御と
いふとあり。もほふ俗
謂貴女為御蓋取貴

即こ んかろま女わむふのうて尻もるん
やがてあぢななるねが なまの女 おひい
祝 清業 ぱいとらるまわらうらうま やうひ 世よ 選俗のみ
かへみまきくもおりら 志はあはれ いかあ 先ハおまのり人
ねが のまらひひてま女わめ かくも おぼ ありにまはよな
どやう 一向 あり 憂 きたる 女の へま あはれ ね 男
ひ ま ころ う とも 女 あり あはれ ね 男
き つ け く な み ぐ お と せ ば
女のおまのり

人女御之義也とあり
とてつてちりくよ下る
ありなれば後よハ女の通
稱とぬく。きんる。ぬ
女とも何御等と
つらあり。くハ侍る女房
の中。ハ侍る。きんる
て。ちりく。ちりく。ちりく。
あ く ちり く 女 房 大和物語
よ。平仲 く 色 好 多 る ぬ こ
といふより。男ぞ 世 とい
み き ころ う ころ と
ま お て の 夜 き ぬ ら ぬ
ひ と み ぬ ぬ
口 を ひ そ ち ら ぬ ら ぬ
く 時 の は け き ぬ ひ ぬ
ハ か ぬ ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ
そ む ぬ 回 一 万 葉 集 に
百 年 亦 老 舌 出 而 与 余

そのより を 女の き ころ う ころ と
つ ふ 人 あ ぢ な なる ね ぐ お と せ ば
君 の ち り ぬ ら ぬ き ころ う ころ と
あり れ あり ら ぬ ら ぬ ね ぐ お と せ ば
かく ち り ぬ ら ぬ ら ぬ ね ぐ お と せ ば
あ わ ち り ぬ ら ぬ ら ぬ ね ぐ お と せ ば
尻 の ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ ひ ぬ
み づ ころ う ころ と
あ く ち り ぬ ら ぬ ら ぬ ね ぐ お と せ ば
後 悔 の あ ぢ な なる ね ぐ お と せ ば
あ く ち り ぬ ら ぬ ら ぬ ね ぐ お と せ ば
志 の あ ぢ なる ね ぐ お と せ ば
く こ ころ う ころ と
堪 忍 ぬ ら ぬ ら ぬ ね ぐ お と せ ば

年徒者不厭 恋者益

友このまをよ懐く老
口ひそみなりぬともと
よみくのせさる万葉
よハハおれ古出くより
むともとよむべきなん
さしどもちくおひそち
ひそととよある義こよ
叶へ万葉のハ老人の
口つきをひひくハ若
々れたさく時の口つき
をひそ

しりたより一はきりや
し初を下の我も人とう
いろめくといふ一旬
をなごそつげく
又さへ伊勢物語よ
お出せ一女子あり
よりくよりひかりつ

ともおほうめりよ

「よびたさうらるるをそれをさるむい」

か

とけもならくふぎたるーとみゆひつべー

よごりに志め候ほごりもあやうかびよ

てはううてあきなるそたぐよひぬべ

くぞきゆる。くえぬもくせあ

さかぞひもにもあさぞ たづねと

りくく人も。やぞ

そのまひ出 けりきりあうざら

んやあーくもよもあひそひくどいん

をりもがらんまゆみをもまきくーたん

なりこそちぎうふかくけりれあめ

我も人をう

ろめくふたれいやハ

がのめよ かつろあらん

ほど終るこころせくと
うれそそいもこのたぐ
ひあり。

あせー女がりやたうひとてけいひそひうらも

たぐひこふおらんきん

そのまひ

世世書

きこいさうー かまうハ辞よ
 してたごハ心へ入つてまじへ
 るまじへーハなぬハなまじり
 ちれバちろそらるるこまじ
 いひふを利しげまを利
 おねと念るれハちろま
 るまじりさひひまま
 きこいさうまじりま
 まじりめちちのこまじり
 りハ事記のちよハ
 をこつてまじりハ
 用ひず。おろろちのま
 ちよ。

ちぢらうさ
 ちぢらうさ
 るを替用してまじり
 りハ事記のちよハ
 をこつてまじりハ
 用ひず。おろろちのま
 ちよ。

人をうみまけしきさみさむらん 女ハ きこたさのちちてふちつけるまじり

まじりまじりーかちあん 男の ふハうつろまか

あつちみさりーん 女の いま

くおり 男の 女の ちろまじり一ちのよれかちあん

あひもあつちま 嫉妬うみの さやうち

んだちるま 申也 まねまじり 怒

ま 女ハ 男は替してハちのまじり ちぢらう 怒

いづ。

嫉妬まじりま 嫉妬まじりま ちぢらう 怒

ちぢらう 怒

ちぢらう 怒

ちぢらう 怒

ちぢらう 怒

ちぢらう 怒

ちぢらう 怒

つぢらぬの
 河海云。文選鵬鳥賦云。
 使乎若不禁之舟とよ
 とよにあひみる女の心
 ちぢらう。男乃んも

ちぢらう 怒

正さるべし一と云ふや
さんとしてちうくのふれ
いとけり。

そいつきこれぞみ

そいつきこれぞみ
万葉集巻第1橋の
つえよむらひきうけい
己が母をさうくをさう
す。己が父をさうくをさ
あはれ伊蘇婆比座興
いうがとちぬとそ戲
をそとへるともいふ古
語。まも法例もまた
むれりのゆゆさといふ
○ざん八洒麗の者と見
えさうらなともさねる
といふ実様よの遠い
く面白く狂様もさ
らふ。おまはら一きま

志づることもあはれなるやまのちのち乃上まは

格のよわるる

さぬこもよとそいふれゆる。又さあよよ

墨捨

おちれどもまらみかきよとそいふりれてしき

下も 上も

よけよおとりまららけらめあよもみえ

蓬萊ハ東海十

日るほぞかきまて人のえおよぞぬほら

洲のこ

の山あはれいづからいをのまががが

黙

さむきりひのがらもあよみえぬおま

鬼

うたはぶのむらさ

もほし夫利の約毘
毘を延れハ。安美とを
る。うらむらうらうら
よりめとちあてのち
あふへ。右ハ実様あ
らぬ。うらむらうら
そぞとちれささて
いろめ記をうら。一旦
の奥あつ女のうらさ
よハけり。うらうらと
れもめうつてするよと
て。

幸とて

これハさうとの調度
道具ハ。まきうら。下
定り。うら。法式法あ
て。だうら。うら。うら
うら。うら。うら。うら

臉

驚うらむらうら

うらむらのおとらうらうらうらうらうら

捨かへ

うらむらうらうらうらうらうらうら

変

めをとおとらうらうらうらうらうらうら

似

人のん

まぬのあはれ

さああうらうらうらうらうらうら

自然のうら

のたすまひらの流きうらうらうらうら

まいたたはあつてうらうら

うらむらうらうらうらうらうらうら

圖

かしてむらうらうらうらうらうらうら

うらうらうら

の上より一たるに格別
 上のありとついでに
 人の本妻なること女
 ぞを志されて今ゆき
 ぞいあらへりては
 の御方の故実をとり
 なる上よのつくりなる
 やくたあらはるは
 りもつくりく
 たるやうにあらべ
 ありて格別のこと
 かく半のこころと
 せんえちて本意ハ
 右よりりのまぢり
 してまづつちるん
 りむきよ又おりの
 んぞ人のおのつり
 るさるはよ
 たよをせせり

一はして格別の
 らぬ山のまじり
 みなり
 あしび
 格別
 志画長
 草書
 だめら

拾芥抄玄畫所
 在蓬春門内東脇御書
 所北有別當五位藏
 人預墨畫等

鬼のうは 韓子曰客有
 為齊王画者齊王問
 曰画孰最難者曰犬馬
 難孰易者曰鬼魅最
 易夫犬馬人所知也且
 暮暮於前不可類之故
 難鬼魅無形者不類於
 前故易之也

一はして格別の
 らぬ山のまじり
 みなり
 あしび

一はして格別の
 らぬ山のまじり
 みなり
 あしび
 格別
 志画長
 草書
 だめら

あみり 花鳥云

雅集卿記云金岡

墨墨山十五重廣

高五重也

うろちびおきり その

もあきののさやまよふを

用おきて天衣純よ

ろあひおきりとま

有意とまを

ついで

考之集よまよふ

んよりさくたひ乃

花の枝をばつば

またく

白氏文集云吟苦支

頤曉燭前

ちりぬれよむはさきりーくとも中侍ん

好色な侍

そちかくなれば

源氏の

あは源氏のあつた

中将いふるまへ

信

類 杖

むらぬぬれ

源氏の

法

とらうまつかせんあのとちよもかついを

説法

かたれががる流ぞおのくあつとも

誰し〜侍宵の中

えーのびらめだるんありん家

あつたつらぬ

Handwritten note at the bottom left of the page.

